

報告

教員対象

ベトナム・スタディーツアー

2014年7月20日(日)～27日(日)

神奈川県座間市立 立野台小学校
山岸 真喜子 教諭



©日本ユニセフ協会

スタディーツアー参加の動機

以前から国際協力や開発途上国の支援に興味があり、日本の子どもたちにその大切さを伝えたいと考えていました。ユニセフのスタディーツアーは、ユニセフの支援事業やベトナムの人々の実際の暮らしを知るために現地ですべての人に会って話すことができるということがとても魅力的でした。自分が実際に体験してきたことはより分かりやすく子どもたちに伝えることができると考え応募しました。

スタディーツアーの感想

ユニセフの事務所があるハノイから寝台列車で10時間程揺られ、目的地であるラオカイ省に到着しました。中国と国境を接するラオカイ省は、多くの山岳少数民族が暮らしています。訪問予定の場所は、駅からさらに車で山の中を1～2時間程行った所にありました。棚田とトウモロコシ畑が広がる中を水牛が歩いているのどかな風景でしたが、ところどころ道に雨水が滝のように出ている所もあり、少数民族の人々が厳しい自然の中で暮らしていることも感じました。

ツアーで少数民族が通う小学校を訪ねたことは、ベトナムと日本の暮らしや教育制度を比較する上で大変役立ちました。民族衣装を着たかわいらしい子どもたちが夏空の下一生懸命歌や踊りを披露してくれた後、私たちが日本から持っていた折り紙等と一緒に遊びました。

モン族が通う小学校では、ユニセフの支援を受け1～3年生は全教科母語であるモン語での授業に加え教科としてベトナム語を学び、4年生からはベトナム語で学んでいます。職員や保護者との会議では「母語ベースのバイリンガル教育を始めてから学校をやめた子はいません。授業中に分からないことがあってもモン語で聞けます。家に帰ってから親に聞くこともできます。よい中学校への合格率も上がりました」という話があり、子どもたちが自信を持って勉強に取り組んでいることが分かり嬉しく思いました。

保健センターを訪ね、子



©日本ユニセフ協会



©日本ユニセフ協会

どもの定期健康診断や妊婦のコンサルティングの様子を見たり、職員から地域の医療について詳しい話を聞いたりできたことも勉強になりました。

センターのある地域は60%の人が栄養不良に悩まされており、子どもの発育にも影響を及ぼしています。センターに来た2人の子どもを持つ母親に話を聞くと、「子どもにはお米と野菜を中心にあげていて、肉はあげられない。卵は1ヶ月に1回くらい」「子どもに元気になってほしい。今は子ども向けの食べ物が大切」と話してくれました。私たちが暮らす日本と少数民族の食生活、食への意識の違いを改めて感じました。急性栄養不良の子どもを助けるためにユニセフとベトナム政府が共同開発した栄養治療食「HEBI」も見せていただき、後に訪問した家庭で実際に子どもが食べている様子も見ることができました。

ツアーに参加するまでは漠然としたイメージの中で開発途上国への支援について考えていましたが、現地で直接自分の耳で話を聞き、自分の目で現状を見ることでベトナムで出会った温かく素敵な人々の顔が思い浮かぶようになりました。ツアーは全てが貴重な経験ばかりで大変充実した時間を過ごすことができました。

帰国後、5年生の児童に向けてユニセフのベトナム支援をテーマとした授業を行いました。ユニセフの活動について簡単に説明した後、現地で撮影した写真やユニセフからお借りした現地の教科書や通学かばんを



©日本ユニセフ協会

見せながら支援内容について説明しました。児童は初めて目にする開発途上国の現状に驚きながらも、真剣な表情でメモをとりながら聞いていました。授業後の感想を読むと、「今まではごく普通の気持ちでユニセフ募金をしていただけ、本当の意味を知って、これからはしっかりと気持ちで募金したいです」「ぼくが当たり前のようにやっている行動が幸せなんだな、と思いました。貧しい環境で生きていても幸せそうに暮らしていたのでびっくりしました。ユニセフの募金の使い道が分かってよかったです」「ユニセフはいろいろな国を支えているから、ぼくも将来そういう仕事に就こうかと興味を持ちました」等、それぞれの児童が世界に目を向けるきっかけを持ってくれたようでした。

今後は、他学年でも授業を行うなど、より多くの児童に自分が経験したことを伝えていきたいと思っています。そして、1人でも多くの人にユニセフの支援の輪を広げていきたいです。